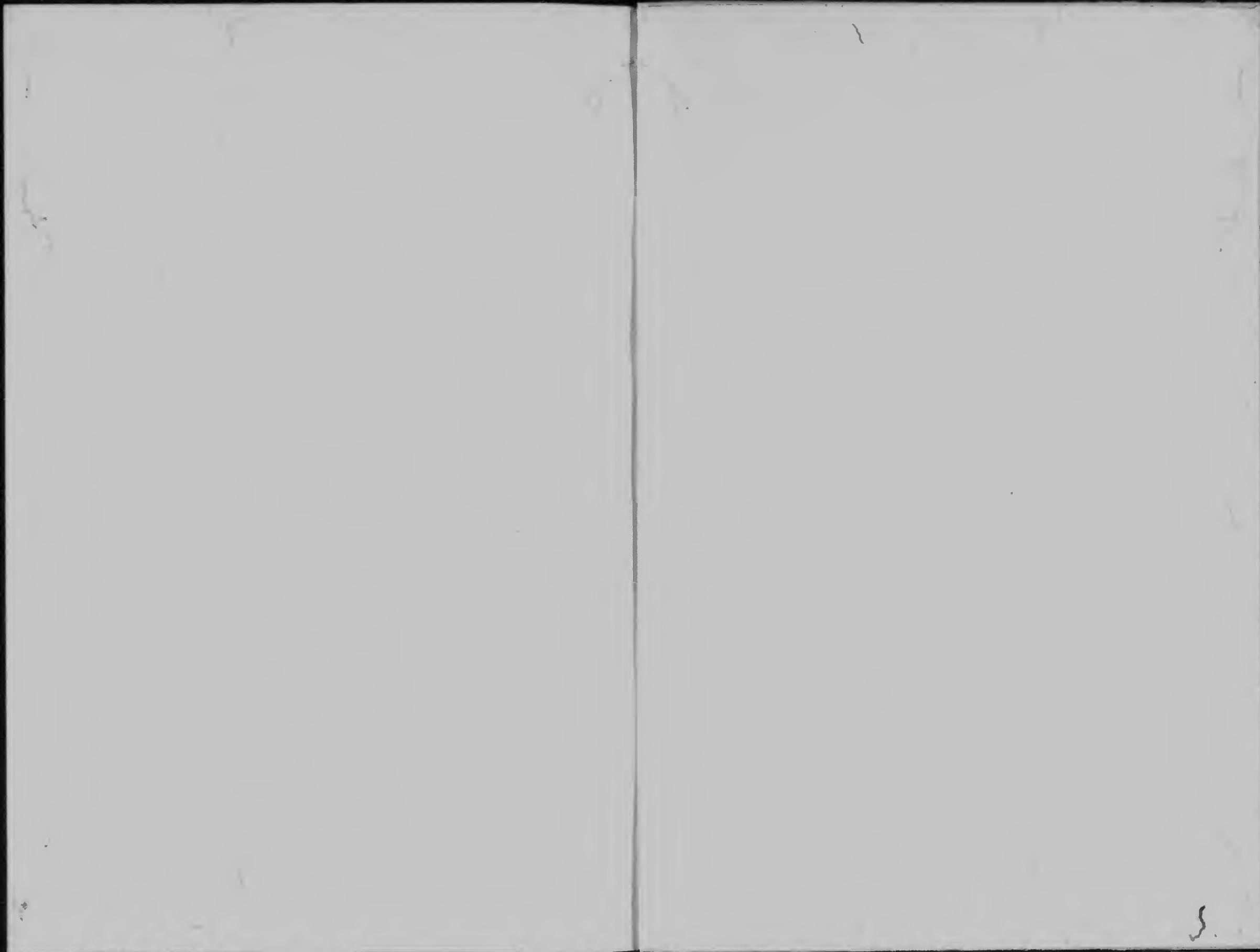


河小作組四番



庫文閣内			
三函	三	三	和
一	九	六	書
二架	冊	九	類

内閣文庫	
番號	和 32569
冊數	394 (114)
函號	152 121



御小姓組四番組

慶安三寅年九月三日九番組
慶安四卯年六月 八番組
享保十巳年二月朔六番組
元文二己年閏七月十八日四番組上成

慶安二年九月三日

右様守信盛徳殿

中山性坦公傳在弟色坦

性坦相承御書守坦 三信儀小生承承承承承承

万治元年三月十九日進物書

寛文三年四月日見の法儀守坦ハ

寛文十三年四月十八日 性坦 守坦ハ

同日守坦ハ先ハラキ料書儀書儀

父ハ頓事儀ハ先ハ同心ハ儀儀儀儀

同年十二月其日有衣ハ如ハ

寛文十三年三月三日海月二五二百石

叙文之在馬門長貞之音名と云河
是事之の音依う一也。

天和二年四月廿日並書加賀音名
上野國邑西郡以回郡也揚々
凡二子音名

宝永三戌年六月十三日拜多合

宝永四亥年七月廿日致仕

宝永五子年六月十四日无字筆

慶安之三年九月三日

丹波守廣岡編孫義祖
津中組小糸右近守文組

津中組松平伯耆守組

音依川勝内記廣有
後子音字音名 改添印

寛文元丑年三月 日跡目子音字

之右兼是之の音依う一奉る伯父

有人（之水廣岡之音名 平常廣意之音名） 宗地と分川事

一音名

寛文七年二月廿日諸國巡檢使と

命と云れ二月十日在東海及之川甲信

為の國と巡視と云ふ一作有る

同世八日法服美令好内服三藏と稱し
同月廿七日と之八月十九日稱し其日
淨徳一九月十日 浄徳より言ふまじく
國々の支那百々

寛文十戌年六月十九日卯奉許と
為りき作有

延宝元丑年九月二日死早と氣

慶安之癸年九月二日

惣書定仍思成

浄世祖也第右等之祖

浄世祖松平伯耆守祖 三言儀 淨月又在篤定長

後惣書

万治元戌年六月二日 浄世院

同日法如思三言儀九言儀

同年十二月廿八日而長志と名をくれ

万治三年三月十日父を奉許と稱し

亦三言名是との言儀ハ父と老と

書少辨と揚し

同日父を嗣法務絶取よ令言すも其時

對恩守願終いり美法國の旗中
之者乃あゝ指揮すゝと傳り
天和二年四月廿日並法加恩之旨石
上野國邑之郡善徳生田村日國影郡
海老野村少くも下凡古者之主名余
元禄元在年四月十九日拜多合子列寸
元禄二年三月七日致仕留權之師
定言子揚り一應承之旨傳之師
老と書ふ料とすゝと傳り
元禄四年四月十九日死七十五歳

慶安三年九月三日

隼人公信治
沖世坦

沖世坦松平仙春守坦 三歳 任澤權在為一歳

貞享四年七月廿日沖世坦卒

日辛三月十二日法加恩三歳元古儀

元禄二年四月三日死

慶安二年九月二日

弟少将守心熱心

弟世祖松平直孝守心

弟世祖松平直孝守心 水野多官守心

後三百係 改少将

弟世祖松平直孝守心 弟世祖松平直孝守心

弟

寛文二年四月日先の湯治小直心

延宝八年三月十日跡目八百石

この三百係のうへに奉る

元禄四年四月廿二日死す

慶安三年九月三日

新庄若廣氏庶子

清水世祖加賀守

清水世祖松平伯耆守祖 音係 新庄若廣氏庶子

後世音係

慶安四年四月廿日

將軍家荒死所也ハニ子家ありク落

野上ノテニ后日光ハ清守送の付

随ハ奉事也

日辛十月 日清加恩ニ音係ハ音係

明曆二年十月 日清加恩ハ音係

音係ハ音係ハ音係

万治元戌年九月朔日申人氏

日年三月廿八日卯辰之と云々

寛文二寅年十月朔日申年

四月日迄の法位と命と云々

卯年四月廿六日疎林の料白紙

十枚と云々 四月法位と命と

寛文九年十月廿八日死軍九条

慶安二寅年九月三日

法本久左衛門信忠之男

清水住組加々丸田中守組

清水住組松平信守組 岩手石 鈴木清盛(一)

明暦二申年十月廿一日清水城の法位と

修考と云々 法用と命と云々

寛文元丑年四月廿三日

禁裏と造と云々 奉引と命と云々

九月三日法服白紙好時服二羽織と云々

造と云々 寛文三年九月廿八日

法備寺

日本分府若陸國宮系新田不色也
之由之由之由之由之由之由之由
少く下

本號月日不知詳入之由係係也組

延宝三年六月廿三日死年七十一

慶安三年九月三日

右是若陸守志若陸守

若陸守志若陸守志若陸守志

若陸守志若陸守志若陸守志若陸守志

明曆二年申年詳入山系右邊之文也

万作三年八月廿一日死年八十一

慶安三年九月三日

七条右衛門守屋忠房

沖小姓組如左四郎守屋

沖小姓組如左四郎守屋 三音依村誠信守屋の西好

後子三音名 後七条右衛門

美濃三年九月三日同日三音名

三の三音依八返一奉る

寛文三年四月日先の通依は陸八

寛文八年申年十二月三日死守九条

慶安三年九月三日

泚小性廻松系御存子組

猪尾書長惣代
泚書院書山台佑存子組
九百三石東條猪尾書長
三斗四升二合

寛文三年六月十日免甲申年

慶安三年九月三日

佐野少将而政秀御男
布衣院番影左卫门守

御出組松平信春守組三郎佐野玄胤政一

寶文三年七月日先口信之云々

諸道具奉以之勢先

延宝四年三月十日死七子由家

慶安三年九月三日

市立利重

市立利重

御山性祖松平佑春守祖

二名

堀教馬利尚

改宮内

明曆二年辛申入任氏年人四組

寛元七年辛酉二月三日死守三宗

慶安三年九月三日

慶安三年三月廿四日

信玄

伊豆組以平伯守守組 于右 阿倍宗元而先改

改

明曆三年七月廿四日

慶安二年九月二日

伊予国松平伯耆守組

後石

改 九
物 妻 子

世傳國球孫部森屋之角伯丹波守通春等

兼惠元在辛三月高田原末三官儀と揚

明暦元在辛七月十二日高田原末三官儀と揚

三官儀と揚一奉

万治二年辛二月高田原末三官儀と揚

修之と奉儀と令之と明の在辛

十月二日切形里と高田原末三官儀と揚

寛文二年辛四月日高田原末三官儀と揚

延宝二年六月廿六日沙使番

日辛十月廿七日日之津國舟付りと命せり

日辛三月廿五日布衣志と命せり

延宝二年正月廿五日大坂津國舟付りと命せり

日辛三月九日津服志と命せり九月廿八日

日辛三月十日

延宝二年正月廿五日津國舟付りと命せり

日辛三月九日津服志と命せり

日辛三月十日

日辛三月廿八日津國巡検使と命せり

日辛三月廿八日津國巡検使と命せり

日辛三月廿八日津國巡検使と命せり

三股城の揚り付日八日揚り洋揚す

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

天和二年三月廿五日一二月廿五日奉多

禁裏降世目地如急之石下野國那那郡上野村
青多村若目田村滝野は村碓迫田國蒲生
郡小田村少く碓元二石下りまき

日辛七月六日市布の部とゆきま

魏町松平藩藩主上地の内九石俵と揚

日辛七月朔日地帳に及法如急りま

揚若原一石日海日活陽と云

日辛三月六日

仰所よりありに叙爵の事俵出され出まき守と改

元禄四年四月朔日言ふ未て洋福

浪言代と改るそ后又上系一と勢

元禄十五年七月九日言に未て洋福

浪言代と改る

元禄十五年三月三日群多合ふ列す

日辛付十有五日田國蒲生郡小田村乃

系比言石田用多うはて改る

代りして上野國新田郡那那村内と揚

村下野國蒲生郡日向村と云

宝永四年三月九日上野國邑樂郡

中野村の系比法用多うはて改る其

代りして下野國言那郡下深江村

程々鴻村とて云

宝永四年三月十日敷仕

享保三年二月三日率八十六石

慶安三年九月三日

清小性組松平信春等組 三喜保久松平而僚恭

清小性守直前久松平在為定佳三男

華魚元禄三年三月廿八日原米三喜保と

三喜

寛文三年四月日光の法統を継い

り三年三月古田村本三喜三町あり

居部三喜

元禄十三年三月廿八日死す

慶安二年九月二日

沙汰院内奉定仍三男

御小姓組松平信春守池 三儀 坪内定三郎

兼寛元元年三月菅原宗言係傷

寛文二年四月日老の御供子通い

寛文八年六月七日沙汰奉行

寛文九年三月三日菅原宗言

及色しとて黄令に附被と揚

寛文十年三月七日菅原宗言

むらひ給い黄令に揚

寛文十三年三月廿一日卒
廟号として黄念と稱す

寛文十三年三月廿一日卒
廟号として黄念と稱す

延宝元五年三月廿一日卒
廟号として黄念と稱す

日比湯とのり

延宝八申年四月廿一日
一統百と稱す
入之田信隆守祖

天和元年三月廿八日死

慶安三年九月三日

清山信祖松平信隆守祖

清山院松平信隆守祖
信隆守祖

三信依田中津守而右明

後世に名を承る

寛文永二年に生れ信隆よりして右明

一代田中の苗字を稱ししる嗣子信明ハ

長野と後す

慶安四年三月十九日卒

万治元年三月十九日卒

万治二年三月十七日卒

入之田信隆と稱す

寛文三年四月廿一日卒
信隆の弟信隆守祖
波山守祖と稱す

寛文六年辛酉九月九日紀伊松本國許
あつてしつゝを流し事行つたれハ
紀の國へ使使しつゝ事行つたれハ
作有日十八日流したの同は百ふれて流用
の事作有て甚金故に人々の御事
陽り明の十九日迄之早業物しつゝ
紀の路は張きすつたれ和奇山は事有
紀伊殿の相付りて管意と陽り益多
おそそ引物しつゝ事行つたれハ
の刀と陽りてそをなとて之に流し
流用の事とやに

寛文十一年辛酉九月十八日

同日沙加急之旨依九七言十言七年九月
日辛酉十月廿八日布告をいふとせられ
延宝七年九月廿七日流用

天和元年六月廿七日松平越後守
老長々家臣争論の事

將軍家へ戻りて出陣しつゝ流用
おしつゝ事行つたれハ
その事
なれハ後英傑たれものど撰
とれて命をいふに右明をいふ
あつてそれを目し事行つたれハ
承見たれハ事行つたれハ

法重代の列候有し申せし其の度
今と傳へ美辨をうさうことと彼
臣等つかな雄猪して事変に
これ其の一人なるに處ふし其れも
法重代をいしう及かくのふき事
何れも是を家おも傳へし余の文もい
しうり同共六日井伊掃部頭より郵より
御信守光長その家地御後守田平
吉方名をいしき豫列松より遊せしれ
三河守細田御後乃鞠(流せしれ)る
作と御信守(前)御信傳へし(れ)る也
その序は連つし

天和元年三月十日中津藩奉行
酒井日向守忠能家忠と収めしれ
うし田中城乃其の御用と命せし
三月十日御信守令松野殿之御後と
揚子其日御信守とて彼地より
城と法重明の戊午四月十日より
帰る二月三日御信守

天和二年三月十日中津藩奉行
日辛九月十日吉並藩加恩吉高石上野
下野の内より御し九月二十日吉並藩奉行
日辛十月十日吉並藩奉行乃改と急き
よし御信守

貞享二丑年八月三日津栢園氏
貞享四年八月十日九日

四月十六日天主教の改と恙なき傳書り
同年三月九日津役とを集まき出書後入
るに保まき書以但し入ハハ明の在年
四月十日たりき

元禄元禄年十二月十九日をそとと後まき
元禄二年四月十七日津栢園氏出書り
をきり

同年四月十日出書りして津栢園氏
元禄四年四月十日津栢園氏の書り
元禄七年七月七日津栢園氏の書りして

てんふ出侍

元禄十五年七月二日致仕嗣子野信明は
九百十二石年七十九合と賜り治男
後江常能明は二石と賜り
元禄十二年四月二日死す年七

右明致仕より嗣子野信明は常能明は
こり致仕の科給りしれは自らその
深りし年とさとして老養の科と
あつる事と止しし二人は成りて
老養のたれをれハ其科贈らん
きしに其世書の著後よりつりて
世と道きしものふたつ者より春
養ふたしして其科をむきわら

其料とらけはくは二人半と
強てその事とせしむつぬ。
その事とらけはくはく
ありし。

慶長二年九月二日

清中住組松平伯耆守組 三景依 清田市重 依 某

某意元在年三月六日 依 某 三景依と
清 社人 依 室 乙 巳 年 二 月 八 日 某 出 て 出 住 組 の
列 せ ぬ

慶安四年六月 日

青行勲系方孝忍成
御書院番水部中務少輔

御中世祖松平伯耆守組 三官儀 青行勲系馬道孝

後中世祖

寶永二年四月 日光の法住日隨入

貞享四年二月 上宮自死

養老二年九月 日

右系も茶室之男

河小姓組内多由之男也

河小姓組松平伯耆守組 三景儀大澤元泰基哲

延宝八申年十一月三日 河内守

同年十二月廿二日 布衣志と名をりて

日 河内守三景儀元泰儀

天和二年四月廿日 並河内守元泰

下野國安積郡舟形村上野國新田郡

飯塚村の内にて 下り元泰名

貞享三年八月廿日 長保奉行

御恩を蒙るに御國の因りて賜る元
ふりおる

貞享二年卯年二月廿八日松平定宗

兼意二年二月廿七日

兼意二年二月廿六日御子名 松平定宗行隆恵所
才白及隆春の三名を分知 多合

御中組松平伯耆守組 子名 松平中尾隆見
政甚三郎

寛文元丑年三月十三日家の系名

作は依る

將軍家乃 台後を介に模寫を

合りて是を系名ハ以て揚る

家々ともむしき乃作と名する

寛文二年九月十日御使者番

日辛十月報目事 卯年四月

日光の法位と合掌を乞

日辛日月辛日大坂法自を代ると

合掌を乞日光の法位と合掌を乞

咽の辛辛日月辛日大坂法自を代ると

合と揚る六月七日由て淨徳寺

寛文二寅年三月辛日布衣志と免

と免

寛文四辰年八月五日臨終御用寺

こゝを乞ふの作あり日辛日月辛日

合掌を乞時辰と揚る三月辛日由て

淨徳寺

寛文六己年九月八日淨徳寺行

寛文六己年三月九日長徳奉行

行日淨徳恩の事名元子名名

日辛日月辛日臨終の同を乞ふて

淨徳寺夜淨徳恩の事名元子名名

該中の料とて小判を乞ふと揚る

寛文七庚年四月二日淨徳寺合子別寺

延宝七辛年三月十日淨徳寺合奉行

天和二戌年二月二日免

養應三年二月七日

養應元年正月日

中御親重春子

小菅信

河内國守御親風

延寶四年正月三日相列之御奉許

以年布衣之御奉許

天和元年六月九日御奉許

松浦内親光御奉許

享保四年八月二日御奉許

享保六年三月十日御奉許

享保七年二月廿日御奉許

養老三年二月七日

養老三年八月二日詔曰七名 柳原八重 政重 政房
中八重 大重 政國 三重 實友 重宗 政友 三重 重和 仲重 重和 人

河出北垣松平伯耆守垣 七名 柳原八重 政重 政房 政國 三重 實友 重宗

寛文三年四月日光乃清信 日蓮ひ

延宝三年二月廿一日 河出先施氏

同年三月廿六日 布衣志と老とま

天和二年四月廿三日 並河加恩 七名

上野國邑樂郡下野國安藤郡のうら
みくろとま 凡そ二名

貞享元年十月二日 拜世安令列す

元禄四年三月廿四日
以任之云云
元禄七年二月廿九日

兼意三年辛二月廿日

山中性祖松平伯耆守祖
言依貞津之常備徳云
後八云

于后扇来云云依之賜

延宝元年丑年 修

延宝二酉年
致仕是云云
享保二戌年

養應三年年六月廿四日

養應三年年六月廿四日 祐豆書

山崎虎房景晴忠臣

山崎家総技脚浪人

御小姓組松平佑孝守組 三音信 山崎長友而宣友

後八巻(集)

長友而宣友ハ父虎房景晴ハ曾祖父

道河佑景友ハ嫡流少シク而子孫之願

死シタリシニ實永平未年九月廿九日

ナリシ不道河河ハ嫡流ト云ハレトシ

カ

將軍家景晴ハ子孫ノ事ト云ハレシニ

其事涉沙汰行ハレシニ一統親族ノ

故有之志を以て経てりふ下
出されしとある家ありしを以て
藤原三音信と稱す

寛文三年四月日光の法徒に隨ひ

寛文十一年二月廿八日死二十九日

万治二年七月十日

清小姓組二枝松澤舟組

三原小倉長四郎三勝

清國守忠右衛門三平次郎

後三音信

後三音信

寛文元年五月十日三音信三音信と
稱す

寛文三年四月日光の法徒に隨ひ

寛文十一年四月十日三音信三音信と

三音信三音信と稱す

延宝六年四月十日三音信三音信と
稱す

元禄十三年二月廿日死中九条

万治二年七月十日

河津中津組二枝抄津守組

河津中津組二枝抄津守正治男

三右衛門後多之思清祐

後思清

寛文元年十二月十日唐原三右衛門

揚

延宝四年十二月六日抄津守組の内

少くも和名石見との三右衛門かへ
奉。

延宝六年二月十日抄津守組の内

少くも和名と揚

元禄上宮年五月十日死六十六歳

万治二宮年七月十日

沖小姓組三枝橋津守組

三宮儀上田仔助元隆

大沖若組元勝惣所

後七宮上宮

後万宮上宮

寛元文元五年三月三日唐来三宮儀と終り

寛元文元五年 月 日海月寺上宮名是

との三宮儀六つ一奉り

元禄上宮年唐来三宮儀有りと終り

あり終り

宝永六宮年十月四日辞入弟津周防守組

宝永七宮年十月九日死六十一歳

万治二亥年七月五日

中山勘解由直三男

中山勘解由直三男

中山勘解由直三男 中山勘解由直三男

寛文元壬午年八月廿日

常憲院殿より神田の御館より

敷洲の御館より

門は入るべく作有る馬術の事と傳へ

まゝしつゝ其門は入るべく御館より

寛文元壬午年四月廿日自害

世目深人あておれりしにちりぬらり
御者を切て之のく腹切くくあはれ
共さふ御不審形甚く願ふ事三言儀と
仰りまらぬ六子及部忠實、伯父
勅解申出守り方小養を色川およ
水戸美門老國師の御教に任る事
仰りて左陽水屋より致す

万治二年七月五日

御小姓組之校勘澤守組 三言儀 津井首領 政好

津井首領 政好

後言石 政好

寛文元年七月五日 菅原三言儀と
致す

寛文十二年 月日 菅原首領

菅原首領の三言儀ハウナ一奉

延宝七年七月五日 死

万治二重年七月十日

慶安元年十一月十日

之在馬場也改其

小菅信少事右左衛門

河内信祖之枝孫孫也 二子九奈流川之右馬頭

寛文七未年六月廿二日死二十八

万治二壬午年七月十日

万治元戌年閏七月十日
卯午名
卯二名
卯三名
卯四名
卯五名
卯六名
卯七名
卯八名
卯九名
卯十名

沖中恒組三枚振津守組
松本内記
改修
中助

寛文三卯年移入滝川長門守組

天和二戌年二月十日
元組
中恒組

大保豊前守組
下中書

万治二庚申七月五日

平保二己年 月日 曾

池田吉良 長治 勘

小菅 隆

平保二己年 月日 曾 池田吉良 長治 勘

寛文二辛卯九月五日

万治二亥年七月十日

慶安二亥年十二月十日

春安の次郎

河小姓組三枝振津守組 三宅主 奈中根 吾藏 勝

内視兼早石

寛文二亥年四月 日光の法住 陸八

元禄二亥年三月 吉野 死 中 六 葉

万治二年七月五日

中世祖之校授律寺祖 三原松浦彦希是道
改元在馬

中世祖行松浦彦希而親内親

寛文元年三月五日唐系三原集と

冷

寛文八申年三月五日唐系三原集と

日幸嗣子之弟之祖文之善祖と之
世と道と之弟希 嗣子八世而自道と
元禄四年六月八日死す唐系

万治二五年七月十日

菅沼御部左衛門守房

交代書合菅沼之水定實書

沖津組之校勘律守組

三原

菅沼大学定之

政務書

寛文元五年三月十日原米三原集と
治

寛文二年四月日光の法然寺組

寛文七年二月輝入本多重信守組

天和元年二月吉田元組河内世組

大久保世宗守組河内書

寛文二年十月九日

兼為三年十月廿五日

上列七日市領主首大和守利表治男

易合

御世組と保出組と信前田守力者能

改

久松守力
相後守力
日向守力

守力者能より先重を弟と云ふ時

少松中納言利常朝の子信て云ふ善悪

三年十月

將軍家より石川藤末二子信と揚

多合守力より石川信列と

寛文八年八月十三日肥前藩末石川守

よりて守力の子と云ふ九月石川服若令

天河殿ニ暇成ニ賜ル明ノ五年 月 日
御之 浮揚

寛文九年七月八日 御書院書紙

日辛未月其旨有之と云ふ

延宝六年八月其旨有之と云ふ

延宝六年八月其旨有之と云ふ

延宝六年十月其旨有之と云ふ

貞享元年其旨有之と云ふ

天和二年七月二日 御書院書紙

上野守邸の内より 御書院書紙

天和二年四月九日 御書院書紙

日辛未月其旨有之と云ふ

貞享元年十月其旨有之と云ふ

貞享元年十月其旨有之と云ふ

貞享元年十月其旨有之と云ふ

貞享二年四月其旨有之と云ふ

貞享元年八月其旨有之と云ふ

貞享元年八月其旨有之と云ふ

貞享元年十月其旨有之と云ふ

貞享元年十月其旨有之と云ふ

貞享元年七月二日 御書院書紙

貞享元年四月七日 御書院書紙

寛文三年十一月十九日

父志原館林殿下所屬

寛文三年八月廿五日

齊合

我守志原殿

清水性組太之保出羽守組

于言名太之保控十帝忠照

改荒之由

元禄年中拜入備后攝津守組

元禄十六年八月十七日免罪書

寛文三卯年七月十九日

寛文二酉年七月

猪俣政長

泷小性

菅原東傳

自寛文四年七月十九日

日奉三月廿五日

元禄四年正月廿五日

日奉七月十八日

寛文三卯年十月十九日

寛文元丑年三月十日

次高利義長子
小菅信

河内性理太右衛門守組 若名 井上柳之進利盛

元禄十五年十月十九日

一之宮と源とてうたふ奉行の事と
命とせし

元禄十五年三月廿八日

時辰二時と揚る八月廿日
古形と係り也

元禄十二年四月廿日

元禄十三年八月十八日先施以耳をく
事とせしむるに思ふれハ形と奉りし
享保四年三月七日老穉時服之を
揚りて奉給の切と應答せしめて
奇合と列す

享保五年三月七日致仕皇宮老帝
利息の料とる所の三音儀と仰る老成
者之料と揚り

享保十三年九月五日死守九家

寛文三年七月十九日

寛文三年九月八日知

佐野五郎政直守

山音信

御出組太右衛門守組 二音名 佐野七郎政房

後三音名

内音儀

寛文六年三月廿七日唐集百儀と

吹入給ひ九三音名

元禄年中入村城守守組

元禄十三年三月十八日死守六家

寛文三年三月十九日

寛文三年 月 日 知

徳右衛門重家啓

小菅信

御山性組入名簿出廻等由 二名石別取御奉行御

其後百俵と云ふ分より凡三名

元禄十六年六月晦日御入講口御陣守組

宝永三年三月廿九日死

宝永六子年七月十八日死六十七歳

寛文三卯年十月十九日

依後奉行六弟在馬二重三男

泚小性組太保山形守組 三首儀若林清右衛門忠正

後三首名

寛文六己年十二月廿日首座兼三首儀と

揚上

天和二亥年十二月十二日分知三首名是

是の三首儀と返し奉り

貞享元年六月十三日死

寛文三年二月九日

御出陣組之御出陣手組 三巻之屋忠信利重

遠別郡長久保町國前町長久保村御出陣手

寛文三年三月廿三日 厚来三巻屋

寛文三年四月廿八日 御入之御出陣手組

日辛七日 日方知三巻名是御出陣手組

返一奉

自寛文三年三月九日 元組御出陣手

之御出陣手組御出陣手

寛文三年十月十九日

河内性祖大守保出遊身祖

大守性祖次新九郎忠則忠胤

三巻儀小川傳之助保願

後身新九郎

後身新九郎

寛文六年三月廿五日原米三巻儀

河内

天和三年七月晦日海目寺新九郎

是との三巻儀之

貞享二年二月廿五日相之向寺新九郎

同年六月十日法中納戸

同年七月廿五日布衣新九郎

元禄三年正月廿五日拜入仙石園情也但
宝永元年正月十日由仙石松平去政守但

寛文三年正月十九日

能登坂左衛門頼之助

由仙石松平園情守但松平去政守

由仙石松平去政守但 言依能登坂左衛門頼之助

寛文三年正月廿五日由仙石松平去政守

元禄三年正月十九日死四十六歳

寛文三年十月十九日

御書院番白書掾組忠兵衛定常参
御出仕組大工保出守組 三景依 菅沼傳九郎 某

寛文三年十月十九日 白書掾番 三景依
等

水方知さきいそりやちやに
日暮日暮地武列部集部景登村の
東光院も佛系一止者とむる
よと中城をかく一談迎ひに
あつ喉房一暮目まゆとやせ
狂疾おぼろふ集地八百石と集集
物居まよと云作かまろ
家助とを思古生涯十日と揚
西徳とを年四月廿日死すとの子
源氏帝近き川十口乃孫と嗣て
法家人とくは家柄とくは依て
近久の院居の後の世思分乃

杖指と嗣一老後ふは獨思
くはまのり

寛文四年四月二日

陸奥町奉行藤助久松助

所小性組久保出羽守但

三原後鳥三九助久永

後子音石

後藤助

寛文六年三月五日
揚子音石
寛文六年三月五日
藤助

寛文六年三月五日
是との三音係返一奉

延宝八年九月十日
らるる所用と命せし

天和二年四月十日
天和二年四月十日
十八人

日辛酉月廿五日並河如忍之右石上野乃
うらみく揚了凡之右石
日辛酉月廿五日布衣之右石上野乃
貞享元年二月廿五日發清水奉行
元禄六申年十月九日祥壽合
元禄十二年二月廿五日死守家

寛文六年十二月二日

兼徳二年十二月廿五日

右馬頭忠重春子
小菅信

河内性祖大倉徳出守徳吉若石川頼母忠英

改之右馬頭

貞享元年十二月二日相之同中

元禄元年十二月廿五日河内性祖
安後出守守徳

寛文七年十一月廿日

初津水姓

新設高尾町之入法男

元津水姓 高尾

津水姓組大工保出御守組 高尾町部大工保出弘

改刑部

西弘元津水姓と上と元津水姓と

高尾町部と上と津水姓組と列と

元禄二年十一月廿日

同年十二月廿日高尾町部と上と

元禄六年六月廿日高尾町部と上と

元禄十一年七月廿日高尾町部と上と

高尾町部と上と高尾町部と上と

行方郡下総國香取郡の田代下
宝永元申年三月廿日致仕を辨言依
とす

正徳四年年二月廿日死す公家

寛文七年十月廿日

寛文六年十月廿日

依方利隆老成
寄合

河内性温公保出相守道 号孝右 小濱中尾昌隆

依方

貞享元年十月廿日山崎の岡の

百とてその為とすとを言せるの

河内性温公保出相守道 号孝右 小濱中尾昌隆

揚

元禄元年十月廿日相問法者

同年十月廿九日元禄河内性温公保出相守道

寛文七年六月廿五日

寛文七年七月廿五日

官内利尚卷子

小菅信任次年人出但

河内信理之保出但身但 云名 河内而利安

後織部

延宝己年四月廿日大信理自為作也

令与色二月九日法服兼令云云揚了

十月十五日帰ル 古顔と云

天和元年二月十九日法使者

同年三月廿日野國為山城之形領

在江守資禮(引渡法南之令云云)

同其日法服兼令云云揚了四月廿日

帰く浮揚す

日辛七月三日播列姫路清目守
孝子の命あつてく日月廿八日清服
甚令校と帰し姫路より執る事と
監して之に帰る以の成の事
四月六日浮揚す

天和二年四月廿日並書賀之百石
凡之百石

天和三年三月十八日江戶の慶
刻清用の事と移り
貞享元年三月九日杉本徳兵衛
忠勝罪あつてく其罪由とわしけ

ま六上徳園依貴城二万石ある事也
日月十八日依貴の城に清用を命
ずし三月朔清服甚令校と帰る
日月十九日帰る六 古顔と浮揚す

貞享三年七月廿九日清目守
八月十八日清服甚令校と帰る
三月廿五日帰て浮揚す

日光の清目守として彼清目守あり
事と監と一事凡七と云
元禄六年三月廿三日水谷屋金丸
清賢の四代徳園松山の城に清用
九月十八日清服甚令校と帰る

を編り明の二月十日帰るに六
古船を導き以松山城へ入り
時の勝罪をくくより一かゝぬ
事ともいふ

元禄八年四月廿日涉段を奪え
三月三日帰るに三月十日の作あり
小菅信よりきき足部丹波守組へ入

元禄九年三月廿日書き情を免
これ八月組より一羽をのむ仕の
作出とす

享保二百年八月廿日致仕
享保六十年四月廿日死七十四歳

寛文七年辛酉二月廿日

寛文七年七月廿日

内友多し其意甚厚

小菅信よりきき足部丹波守組

沖小姓組大久保出羽守組番頭内藤高直

後九七

延宝六年辛酉二月二日死七十七歳

寛文七年七月五日

江府町奉行渡邊左衛門経貞出書

津中津組大久保山形守組 三音依渡邊守平七郎格高

改 右三音依
書 津中津守

寛文九年五月五日唐系三音依上

終

寛文十四年七月五日中久津中津

四年九月三日奥津中津

四年三月五日津加恩三音依九音依

四年四月八日船寄三音依右系三音依改

寛文七年辛酉正月廿日

御性祖之保出御守組

三石 山中平右新後

御書院番番出御守組公家奉使惣所

後子石

改 宗 氏 氏
丹波守

寛文九年辛酉正月廿日 原末三石信之傷

元禄七年申年三月廿日 赤松守石是之の

三石信之返一奉る

元禄七年辛酉正月十日 松平主膳之願分

長門國萩口 國津園守之と書すは此

作有る七月朔日 赤松守石是之傷

明の辛酉年之より

元禄八年八月廿八日津使番

同辛十月十八日布衣之と云々

元禄九年二月廿八日津留守

元禄十一年四月十日中野津園の津用と

令云々是林益布云々長濱津用

と云々是云々云々云々

元禄十二年八月廿八日

仙洞津新降世日津如恩之云々云々

同辛十月朔日津如恩之時云々

同辛三月廿一日津如恩之時云々

丹波守と改

其後約述云々云々の時云々

云々の時云々と云々

元禄十三年四月十日津如恩之時云々

津如恩之時云々と云々

元禄十四年四月朔日津如恩之時

津如恩之時云々と云々

元禄十五年三月廿八日津如恩之時

津如恩之時云々と云々

宝永元年九月七日津如恩之時

津如恩之時云々と云々

享保九年四月九日津如恩之時

津如恩之時云々と云々

寛文七年三月廿日

河津性組大原出羽守組

河津性組大原出羽守組に在る定勝費

三後 右條傳十郎先行

後名

後 伊藤 信

寛文九年三月廿日 原米三郎信と

信と

延宝八申年九月七日 源目右衛門

三郎信と

天和三年九月廿日 菅右衛門國右

候 野村信と 誠貞と 引渡津用と

命と 色目月廿八日 津服美合と

延暦十一年四月十日 伊弉册

自寛元元年三月廿七日 高直中

大同元年三月廿七日 高直中

自寛元二年二月十日 高直中

延作と云

自寛元四年二月十日 高直中

延作と云

自寛元五年二月十日 高直中

延作と云

延保元年四月廿七日 高直中

同元年三月廿七日 高直中

延保二年七月十日 高直中

延保四年三月廿七日 高直中

延保六年四月廿七日 高直中

延保八年四月廿七日 高直中

同元年六月十日 高直中

延保九年四月廿七日 高直中

延保十年四月廿七日 高直中

同元年五月十日 高直中

延保十二年四月廿七日 高直中

延保十三年四月廿七日 高直中

延保十四年四月廿七日 高直中

延保十五年四月廿七日 高直中

元禄十三辰年七月九日辰のこゝ
別荘の地を揚ぐべきの作とあり
日年月日見流川上橋の裏に
二の坪と別荘の地は揚る。

元禄十四年十月某日信儀より政

宝永六丑年二月五日一統をなして奉命刻

宝永七寅年三月四日西殿の下に部

所用ぬらひにて納りまやうとして

三番所あり二の坪の地を揚る。

宝永七宮年四月五日致仕誓とて

圓強と云

享保二酉年十月十日申子子七辰

寛文七未年十月五日

御小姓組大之保出組守組 三原大岡惣奉行

延宝元丑年十月五日御印書新乱心死

寛文十戌年二月廿日

寛文二宮 年十月廿八日 菅野中入

徳勝長尾乃松資忠

中入太保事

御小姓組太保出羽守組

後言信 改派

長尾乃

長尾乃

源右衛門松有ハ徳勝長尾乃松資忠乃

腹小生色一子中松資忠妻ハ徳勝乃

松付守松次ノ如ク相首ハ後妻嫡

母トシテ松次ノ妻ハ福ハ後松列ノ同母ト

シテ一慶安元子年

將軍家ヨリ古書也

蔵有院殿の御傳日付も近頃為と云々也

厚并之儀に十日と揚ぐ此身由身と
おこしむる春日局より出るころ
けつさぬとて大志とけく内々の事と
つうをさう寛文二年十月十日吉子
源右馬頼有と中人頼小右衛門
百傳十口と揚ぐ寛文十四年宵昔此に
局に任殿の由籍へ長福殿初て出仕
少い見あま入る小治と後さひの由使と
替ゆりしに福ひ儀よおとせり
老福斗舎しそ日月は音よ八層よ
飛くん事さくかるあはれとせ能勢
次郎の頼宗うきよくくん事内取

一にゆきまきし一かき平川河うり
流かきまきしに平川のあは一談
意く集りそ肩輿とむひまきこ
將軍家の御しそ官醫二人改所む
まきそよ平川の舟に至りしに由使
若由也儀もまきし近江の由れし
しによきは近江のめ一談意、
かきゆりしとほりしに
將軍家の作局の福ひ安う次思信
源右馬頼有と中人よ連うてはさしと
世友神由性頼有とくくくくく
流加志とも流くくくこの作有るれ

悉く感涙を分りし沙汰次第は
松宗を其仰の有様を謝し奉り
た多し執政の方へ出ぬ又より松宗
仰より帰て痛ひと長ひに日月七日
守七葉して多々心要院より
そをき教と池より本門寺より送
其より成す一書あり

將軍家三日沖精進世と音楽と止
事三日の令いて二月二日は
上使を保出相尋とあり奉り
の三日近江の初七日多きは
多部後後とさけり奉り作らうて

白根崎白米儲とりし近江
冥福よとありて日月五日
仰のさしし深右ら頼有と書申に
百三十一
寛文十一年三月五日沖精進三日儀
九三三儀とりの十日ハね

宝永元申年三月五日留念小川町沖用那奉行
二徳三三申年七月十六日祥入を保法隆寺
宝永元申年二月十一日死七十六歳

寛文十二年九月十三日

御世組任次至水組 音儀 安部次清重年

系部町奉納官階至格守重威治力

重年丑年子生うま六母子の姓と

以て氏とて安部と云

その後唐東三音儀と云

延宝六年辛酉九月九日御世組

口辛三月某日法如恩或音儀九音儀

延宝八申辛酉九月一統老と云

安部合子列寸

貞享四年二月三日死三十九歳

寛文十二年五月五日

明曆二年十二月 日 曾

台左年去光西想所

中書信

河内性組伊次平水組

吉原 山口左年太光俊

延宝二年五月五日死

寛文十二年六月廿日

御中道徳侯以集人四組

御中道徳侯以集人四組

三宮侯之御長九郎忠宗

後子九百石

後子九百石

延享二年三月十八日御書三宮侯

揚

元禄十五年七月六日御書于九百石

元禄十五年御書九百石侯

御書

宝永元年十月十日御書

御書

村之沙月名にきさるの作有十月廿
沙眼黄令如と揚る明の百辛四月
正月帰く洋留守
宝永はき辛七月正。本訓奉以と
兼つま作所を
西使の辛辛四月九。本本を以承
勢しこの作有てきさる。

享保元申年十月九。辞入公保法隆寺住
日辛四月十日免七十の果

寛文十二年十月廿六日

大津表但次之住鳥の西光書

沖中住但仔以年人合但 三信小美系為住鳥成

延宝二意年二月十日唐来之信と
揚る

元禄二三年十月六日板之向海書

日辛十月廿五日山童信合内系子野分但
元禄二三年二月廿六日青山丹法寺但
沖中住但鳥書

寛文十二年六月廿一日

河内性但伊波主水正但 三景山官山又三帝留方

三帝留方伊波主水正但

改

丹後守

延宝二年三月廿一日

延宝

延宝八年六月廿六日

延宝八年六月廿六日

天和元年六月廿二日

天和元年六月廿二日

天和元年六月廿二日

日辛九月八日少曾孫乃道松浦
内記元組

天和二年九月朔日元組清小性組
大分保豊元組下為長

寛文十二年五月廿六日

清小性組伊波之水正組

清書院長松平世宗元組長一親
三景後丹羽權十郎長守
後子石 改元後
在江守

元禄元年五月九日家督子石也

この三景後より奉る

元禄四年八月廿六日屋敷改と兼

元禄五年申年五月廿二日清多守と清

せしめ清用は清多にゆりて事と

廢せせめひと美念三河殿に成と為る

元禄七年六月十日法使表

口奉七月十八日布衣乞を免され

元禄七年四月十日旨法使表

元禄八年二月九日長崎奉行

口奉八月六日法使表令討服之助威を

揚り旨知舟作書り遠江守と改

被死之儀を其事を誓て去る

被死に去る

元禄十一年八月十日旨法使表

北日新恩の地を乞ふ事と揚り凡ふ乞ふ名

口奉四月十日旨法使表

口奉六月十日旨法使表

高保十一年七月七日死乃十七年

寛文十二年辛酉月廿一日

御書院者松平維良御組松平金富御実忠
御山内組伊波主水忠組 三景松平守直御成吉

延宝三寅年十二月廿八日 廣東三景御上

終

壬辰后垣井氏子後一書記

宝永七年辛酉月廿一日 御成 死守七景

寛文十二年六月廿六日

御中世組任以主水右組

御書院若瀬井中総守組清美重持書子

三宮儀 山田市前之清満明
後之儀 後改傳存儀

延宝二宮年三月廿六日 唐東三宮儀之儀

延宝五己年 月 日 之 物 表

天和二己年三月廿八日 唐東三宮儀之儀

の三宮儀之儀一奉子。

國書二己年六月廿日 祇法園高田

清國守仲と令書之是七月廿八日 祇法

美令之儀之儀一奉子。

元禄三年九月晦曾桐向清書

同年十月日曾元祖若由世祖安及他帝
組白物書

延宝四年正月十四日

延宝二年正月十日

清世祖大元保豐花守祖 二石 多賀 左近常之
改又口部

古原乃常良忍所

山善信大元保右事元祖

天和二年七月五日 越後守南道守

とて書き此作す 日月年古多服

其令と協と明の 年日月曾

物と清得守

元禄六年正月八日 奉新奉行

元禄八年正月十日 日本在也乃

清用と物ととて其令改は股三職と

元禄九年七月 日本初上
名子(色)

宝永四年九月九日死

延宝四年四月十日

寛文七年三月十日分知

江原守右衛門親金之男
小笠原信

河内性組公保豊前守組三音右 江原清美全賢

改

官内
傳八郎

宝永元年八月其旨群入弟保周防守組

宝永四年十月十七日死

延宝四年正月十日

御中世祖大御所豊永御前 三景儀六角頼母廣治

後御前
従五位下侍従

殿上人六角重權以度質息男
右馬頭殿御前老女左近衛内少輔道善御孫

同日三景儀と御前 侍下侍従

侍下侍従

元禄三年正月其日高家

同日侍加恩七首石凡石

同一年二月廿八日侍下侍下 叙也

侍従下侍 官石七頭石

元禄三年正月三日撰列 侍下

使を合さし九月十二日馬服美姪
時服二枚感と給し其事年々互に
ゆりて 古教と給す

同年六月廿日日光へ代書使として
来りきよし一併ゆり廿日馬服
美姪二枚感と給し其事とばし
うりし替りてうりにゆり

元禄五年四月廿日

桂昌院君の代書使として替りて
来りきよし一併ゆり

同年六月廿日日光へ代書使として
来りきよし一併ゆり

同年八月六日

桂昌院君の代書使として替りて

来りきよし一併ゆり又ひ来り

二ととも同春夏秋三つひ替りて

代書使として来りきよし一併

あつて其事何のきこらるるか

二ととも同春夏秋三つひ替りて

元禄七年九月廿日亦も

後西院帝宸筆の深きも東

敵山乃

公辨法親王法文と作をりて

御在り唐法より其事

御奇々

蒙たうと春日の心も可なり日は
くわんわんあつてははるあつ

元禄九年七月十四日別御作と記す其の
後と命をいれにまはるあつと
記す互教され記すあつと
作らる

元禄十一年四月三日御指の事陽道
以向く致仕して其身をとりて
今とす御作らる五月の六日権記
りて

元禄十四年六月二日元禄十一年

延宝の元年六月十日

明暦三年三月廿四日

尾崎定政書
小巻信

御小巻組の御書本守組子石 阿倍宗重書次紀

自元禄元年三月廿七日あつと
あつとあつとあつとあつとあつと
元禄九年三月廿五日あつとあつと
あつとあつとの勢あつとあつとあつと
元禄十一年九月十日一統の全場
一附全書あつとあつと

宝永二百年十月朔日 皇代甲子の内
五名法用のふりしにて 執りし作
とてと 徳園のふりしに

宝永二百年二月十日 松平左衛門初
知れハ彼願ふ事 徳園松平の國守
とてと 徳園の作ありしに 皇代甲子の
黄令に 徳園の明の皇代甲子の
ゆきと 徳園

山徳元年十月朔日 河先地

日辛日十月十日 布衣とて 徳園
山徳元年八月十九日 徳園の
徳園の作ありしに

山徳元年三月十日 加波の事
徳園の作ありしに 徳園

山徳元年八月十日 徳園の
加波とて 徳園

山徳元年六月十日 徳園
有章廟の徳園とて 徳園

山徳元年八月十日 徳園奉行
日辛六月十日 徳園の徳園

山徳元年四月十日 徳園
徳園の徳園

山徳元年四月十日 徳園
徳園の徳園

延宝六年三月廿九日

大御書取次校持守古俊守

御出陣組大御書取次守組 三條 二校下番守組

後任持守

延宝七年三月廿九日 中興御書

延宝八年三月廿九日 御書

延宝九年三月廿九日 御書

延宝十年三月廿九日 御書

延宝十一年三月廿九日 御書

延宝十二年三月廿九日 御書

延宝十三年三月廿九日 御書

宝永元申年八月廿日
宝永七寅年二月廿日
伊豫守と改

正徳元年二月十九日

延宝六年三月廿九日

河津恒太之孫

後三子名

延宝八年三月廿日

元禄十二年三月廿日

元禄の三子

揚子

元禄十三年三月廿九日

河田恒守

二月十日

十月十日為て浮陽守

元禄十二年二月十日為て浮陽守

同年月三日踏屋(浮陽守)にて
其の作所(同)に於て
其令(同)に於て為る(同)に於て
為て(同)に於て

同年三月廿八日為て浮陽守

元禄十二年九月廿一日刻前(同)に於て
同月廿八日為て浮陽守
其日為て(同)に於て

宝永元年二月廿九日為て浮陽守

延宝六年二月廿九日

沖田戸牧七郎長高養子

沖田性組久保豊前守組 三右衛門長高

改又十郎
七郎等

延宝八年二月廿九日為て浮陽守

福)

元禄二年四月十三日為て浮陽守

同年九月十日為て浮陽守

同年十月廿九日為て浮陽守
其令(同)に於て為る(同)に於て

元禄三年二月廿九日為て浮陽守

越前守組上御書

延宝六年三月廿九日

治部省御書

相列乞水奉行治部省御書

河内性坦公係豊永守坦三景依大岡新十郎由信

後十郎在馬

延宝八年三月廿六日原三景依稿

元禄元年七月某日死

延享六年三月九日

元 多合公儀の教重以御意

沖小姓御入之儀書奉身但 若名 神谷清高而保教
改保書

以目父之遺跡之儀書奉身

沖小姓御入之儀

口年七月十日父之遺跡若名之儀

元禄七年奉 辭入之儀書奉身以但

元禄十五年周二月廿六日死之儀書奉

延宝六年三月九日

御出仕組大御所御書

長谷寺板倉御書

三條寺板倉御書

改九条寺

延宝八年三月廿一日

延

元禄四年三月廿一日

御出仕組大御所

口奉三月廿二日

口奉四月廿二日

元禄五年三月廿一日

元禄五年

元禄十五年七月五日海濱之字石舟山田
三多史其周上七百石と分月見返の書係に
返一奉る。

同奉八月十三日お智の洋謝として
金鳥代と勘り又父重紹の遺物として

將軍家御願法城寺代令と勘り

御臺所下夏冬集おをり 全部と勘り

桂昌尼君の金葉和祈集二葉と勘り

元禄十五年三月廿八日新油番次

同奉七月十日午別斗り小奉書奉り
只今御申に伺候すまことに
ありしに未のなる中乃同り

百とて承念丹信も昌尹相伝
作と傳りしは日光の清信と金葉と色
すしに竹の間としてお願書と改書御信
奉書と後と書し御承りと伝り
申の別まことと書し十六日日光と三十八日
ゆり十九日御承事と返りせり十八日
西湖のるはて洋福す

宝永元年申奉柳系の御清用なる

よはて勘りし御承りしと奉傳り

清ら所にて二五坪の地と伝り

宝永二年九月朔日日光奉り

同奉同月九日御役御書係と伝り

享保六年二月二十日

同日月日其日道中奉引(引)門改之

第一(引)作之(引)

同日八月其日分限快改之(引)金(引)也

享保七年二月三日(引)板(引)改(引)

松平和重(引)自(引)来(引)色(引)引(引)後(引)河(引)内(引)关(引)帝

也(引)引(引)日(引)月(引)九(引)日(引)湯(引)原(引)美(引)合(引)時(引)辰(引)

羽(引)藏(引)之(引)終(引)了(引)七(引)月(引)廿(引)三(引)日(引)御(引)之(引)洋(引)獨(引)守

享保十二年四月廿五日(引)卒(引)年(引)九(引)岁

延宝六年二月九日

伊予守組大工保豊屋守組

若部惣清

延宝六年三月九日

寺中住持大久保重光守領

川田主税

天和元酉年二月廿六日

寛文七年七月廿四日

三宅藩の征盛忠成

中津藩松浦内蔵元祖

河内性但太之保豊茶也但云云奈(潞)川彦(以)而元長

後 備忘寺

瑞磨寺

元禄九年六月廿一日法使書

日辛八月廿九日日光の法圓を仰りと

命せしき九月廿三日歸り其日行の

同少く法圓の事とす

日辛三月廿二日而長云々と云々也

元禄十五年三月二日母(法)圓(法)律

城(法)律(法)律と命せしき四月

古日法眼美を改時股三羽織成
揚り白月夜を揚り古日竹の同は
法用より八月法用

同年十月七日一番所の部法用
りし

同年十一月朔一番所の部法用
よりして秋とい月七日水田所

内田出物より秋の地を法用
と揚り

元禄十五年十一月十日法用

元禄十五年十一月十日法用
としてききら此作はり十一月十日

揚り古日竹の同は法用の事なり

元禄十五年九月七日法用
としてききら此作はり九月七日

古日法用の事なり

元禄十五年九月廿日相のる法用の事

同年十一月十日法用

同年十一月廿日叙身作きし法用

宝永六年十一月廿日干駈並西福

寺法抱地より法用

叙身と法用

同年十一月廿日水田所の部自火

叙身と法用

作書とて誦日ある

宝永六丑年二月廿日流相向書の紙と
多々れ多分今列す

享保四丑年二月廿日流相向書と
撰りて書信組の書紙と今多々れ
しに先長を列す入流相向書と流
新書紙のよも候す下と作書と

享保八卯年六月廿八日流相向書と流
勢のうららと名と流の作書

享保十未年六月廿三日流相向書と流

享保十三申年十月七日流相向書と流

享保十五辰年七月廿日流相向書と流

古坂丹後守頼徳川後流用と今

多々れ九月廿八日流相向書と流

十月三日流相向書と流

享保十七子年十月廿日尾流相向書

揚入流使と今多々れ

享保十九辰年十月廿日流相向書と流

元文元辰年八月廿八日流相向書と流

元文二乙年六月廿三日西流相向書と流

元文三卯年六月廿三日西流相向書と流

元文四辰年六月廿三日西流相向書と流

元文五巳年六月廿三日西流相向書と流

同年七月廿日西流相向書と流

元文二年七月七日形ひのこ
きき痛まて別在の比言作と爲る
延享二年二月三日多味草抱地
乃家舎出火まて焼也と爲る
まふへしと明の十二日作出と爲
かて同日に日世のあつてはか
清用整くくも別の候と爲る
そまふと爲る

延享二年二月十八日

養仙院君の清新華法進福の事と
執事とあり傳有七日間の事と
とありとあり時服日と爲る

延享二年二月二十日

天和元酉年二月廿一日

延宝三年七月十日

元禄七年九月

小菅信

伊豆性祖公保豐系守祖七喜山口夜夜馬光冬

元禄十五年二月九日

元禄三年二月廿一日

元禄三年二月廿一日

同奉八月廿一日

組白物表

天和元年二月廿一日

神中世祖大友保世宗守祖 三子依 菅沼親家任定之

菅沼親家任定方六男
出菅沼大友保右系三子祖

元禄八年八月朔日死

天和二年九月朔日

小宮山傳五郎直真出方

小宮山傳松浦内務元組

御水陸組大為保豐老組

海番

右名 小宮山伝五郎出方

後丹後守

元禄八年十月廿日相向陸番

口年十月廿日陸中組

元禄十一年四月廿日道奉新

此道
之各郡出者大出者より命下りて昌之乃
ひとく) 布衣にけし由内より命下りしり
殿さきしりしり
そのたさきしり

元禄十二年十月廿日乃家地陸中組

よしにせぬりまはしりて下野

國のうちより一掃

西徳二百年四月十日沙国争

西徳二百年二月十九日

禁裏附註日清加恩千石丹波國より

新下凡子古西石

同争四月八日清服黄令坂时股

三相威と終る

同争四月十日

御所より御書に依り丹後守と改

享保四十年三月十日迄次第

洋傳一報を代と改

その後又清服と終りて京師より

替む

享保八年三月十九日老穉時胎と

掃く家令より列す

同争七月十九日致仕

享保十六年八月十三日卒七十九歳

天和三年閏正月廿日

天和三年九月廿九日

酒井修理左衛門忠重

御世組公保豊永守組三右衛門酒井救馬忠塚

改緘部

元禄三年正月廿七日御使書

日辛未月廿九日日光寺園手付と

命をささぐ川世時

御神股と持あつた三月廿三日

日辛未月廿九日布衣志と先さき

元禄四年正月廿九日日光寺園手

とてささぐの作りし日辛未日

河原美奈河原三之孫也其有立也
之廿八日諸君子弟也十月十日也

廿八日洋湯子

元禄六年六月十九日老湯同子
仲と今と也廿二日也

元禄七年三月廿日河原下湯院

元禄八年七月四日祥山書信也

乃也也那丹波守組也入

宝永四年八月七日死年七十五

天和二年九月廿五日

御小姓組大御書前守組 三後大御書前守忠香

御書前奉行甚多諸君景忠也

後之也

後之也
大御守

曰年原来也也也也也也

元禄元年十月廿日也也也也

元禄二年九月八日自家智也也也也也

元禄三年八月廿日也也也也也也

元禄四年三月廿日也也也也也也

元禄五年八月廿日也也也也也也

元禄六年七月廿日也也也也也也

元禄十五年十一月廿八日御使書

同日布衣志とある

元禄十五年十一月廿八日御使書
仰りて命をくだりしは廿八日御使書
候と御使書の事 元禄十五年十一月廿八日御使書
拜領す

元禄十五年七月庚辰未嘗儀と信
國加茂郡田舎郡に徳國首領那乃
うららに候

元禄十五年十一月廿八日御使書
元禄十五年十一月廿八日御使書
命をくだりしは廿八日御使書とある

候と候

元禄十五年十一月廿八日御使書の
御使書の事と命をくだりしは廿八日御使書
元禄十五年十一月廿八日御使書と候
御使書を副らるる事とあるに候
御使書とあるに候
御使書の事とあるに候

元禄十五年十一月廿八日御使書の
御使書の事と命をくだりしは廿八日御使書
元禄十五年十一月廿八日御使書と候
御使書を副らるる事とあるに候
御使書とあるに候
御使書の事とあるに候

同年月日青田原の法沙如恩
ゆきの楊地なる事

宝永四十年上より乃きり新田乃
事(法沙如恩)

宝永五十年上より乃きり

台嶽と云ねんた先なる事あり古
洋獨し毛種と云る

宝永五十年上より乃きり

日比立街道の奉りといふ事

宝永五十年上より乃きり

新田法沙如恩乃法用といふ事

口年九月上より乃きり

憲廟の周圍の法沙如恩乃法用と

令りし事

宝永七十年上より乃きり

乃きり乃きり乃きり乃きり

道乃法路を奉るといふ事

つき作りし九月上より乃きり

新田法沙如恩と云る事

法沙如恩

宝永元年上より乃きり

法沙如恩と云る事

乃きり乃きり

宝永二年上より乃きり

別冊として多巻に因念十人と預けし
同年九月十日春日の

河神急津彦命御しとありし色

享保元申年二月三日津波と集らん
此書信より入らる朽木園防は徳吉の
をよめとあるれ

享保二酉年四月田島外郎の部を集
これ白紙と云ふ

享保四丑年八月三日高尾山麓に記

享保八卯年四月三日高尾山の
登つて津波の浪を代と云ふ

享保十巳年六月三日致仕

享保十二未年九月八日申年八集

天和二年九月廿日

清國守又三條忠武親成

御性組大之儀豊元親組 三條之由又歸出唐

後又三條

同年前原系三之儀と云

元禄二年八月廿三日父重信が御性組
有る分都集人守に就けし事は父の
事と云ふ

元禄二年四月廿六日古方市に被頼

元禄二年五月八日配下と免と云て
江戸より出

日辛八月十日死

五房の子膳... 五政四代乃家
而此... 元禄十三... 年六月廿
何... 元禄... 年... 八月廿
御

天和三年九月廿一日

御出仕組大御書... 三原大田藤左衛門資光

大御書組... 資光

法皇名

同奉... 御

元禄... 年... 月... 日... 御

是... 御

享保十七... 年... 御

元文三年... 年... 八月... 御

天和二年九月廿一日

河津恒祖公之保書之守祖 三言儀 始公之助可能

河津院書中根之院守祖中之可英養子

後古三石 後中三石

至後原系三言儀と揚小

之保而申年七月廿三日跡目七百字石

是との三言儀と也一奉る

之保十五年十月九日そと来一月

之保原系ありと之保はあり

揚の仰有まし四所或別川城籠井村

所用ありよしにて保し申し

智化院をいひりて内福なり

元禄十五年十一月廿六日死す

其目録久き事可寛よ明の事

分月並別の持玉郡下新郷村

言す名まゝ一は郡ふる北條

野原村よりと名をとて

